

## ■シベリウス／交響曲第7番八長調 Op.105

フィンランドの現代作曲家、カイヤ・サーリアホが今年の夏、サントリーサマーフェスティバルのテーマ作曲家として来日した。彼女が選曲したオーケストラ・コンサートでは「影響を受けた作品」として、シベリウスの交響曲第7番が演奏された。そのパンフレットで、彼女はこの曲を「テンポとテクスチャーという点で、いくつかの驚嘆すべき瞬間を含んだ、力強い音楽ドラマ」と評している（サントリー芸術財団サマーフェスティバル2016のパンフレット、59頁より）。前衛が主流を占めていた20世紀音楽史において、かつてあだ花のように扱われてきたシベリウスだが、モダニズムの規範から解放されたいま、彼の音楽に秘められた急進的な新しさが再評価されている。

第8番は未完なので、1924年に書かれた第7番が完成された最後の交響曲となった。スケッチでは複数の楽章を考えていたが、最終的には22分あまりの単一楽章となっている。異なる性格の主題を並置しながらコントラストを生み出し、交響詩と呼ぶほうがふさわしく感じられるほど自由な形式でまとめられている。まず、アダージョでイ短調の音階を上っていく楽想が奏でられるが、すぐに八長調の透明感のある楽想が続く。朗々と歌われる弦合奏に金管楽器が加わり、大きな軌跡を描いたのち、冒頭の音階のモチーフが再現されたあたりからテンポが速くなっていく。愛らしいフレーズを挟みながら、やがてヴィヴァーチッシモの八短調の楽想となる。途中に挿入されたアダージョはトリオのよう。再び激しい楽句になったのち、アレグロ・モルト・モデラート八長調の民謡風の楽想が奏でられる。それが展開されると、ヴィヴァーチェとなり、壮麗なクライマックスにいたる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。